

NO35

自宅裏の防空壕

所在地は鳥羽市浦村町本浦（三交バス「本浦港」下車すぐ）



本浦地区は、入り江の奥に位置する海岸沿いの集落です。戦時中、鳥羽港には海軍の基地や軍需工場があり、また町の上空は戦闘機の航空路にもあたっていました。そのため海岸沿いや離島の集落でも爆撃による負傷者や死者が出ていました。

地区では、外洋に面した石鏡地区の軍監視所があげる旗を目印に、警防団が「警戒警報」の鐘を打ち鳴らし、町の人に避難を呼びかけていました。

海と山に挟まれ、逃げ場のない住民たちは自宅の裏山に、各家庭の「壕」をもっていました。家の裏窓から飛び出せばすぐ入れる位置に穴が掘られ、2カ所の出入り口がありました。そのような壕が多かったのは、片方がふさがれても、生き埋めになることを防げること、壕がない近所の人たちも入れるようにとの配慮からでした。

戦後60年を過ぎ、家の改築や新築などにより、壕は埋められたり、崩されたりしていますが、この壕は今も、ほぼ原形をとどめています。

20060915 掲載